

少年イエス

今朝、わたしたちに与えられた聖書箇所から何を聴くか、どういう意図をもって福音書記者ルカがこの出来事を記したのかをずっと考えておりました。つまり 12 歳のイエス様です。イエス様が伝道者として立たれ、ユダヤ全土に神の国の到来を告げて回られる、これはナザレでヨセフを助けて働いていた状態から、父なる神の御心にそった伝道の働きに入られたことを指すわけで、ここから公生涯に入られたという言い方をします。ふつうわたしたちはこの状態のイエス様のお働きを聴いているわけです。またルカ福音書やマタイによる福音書には生まれたばかりのイエス様の記述もあります。これは徹底的に受け身の状態、つまり、まだご自身では話すことも歩くことも出来ない状態なわけで、そこまで小さくなってこの世界に入ってきて下さった救い主という切り口で語られます。しかし、12 歳は？この状態のイエス様の姿を取り次いだのはルカしかいません。しかも、少年イエスの活動の舞台はエルサレム神殿です。今回、ルカ福音書にだけ記されている特殊記事と呼ばれる箇所から御言葉を取り次ぐことを通して、福音書記者ルカの見ているものをもっと見たいと願ってきました。ですからルカがこの箇所に込めた思い、それをどう聴き取り、現代に生きるわたしたちに何が示されるか、それを考えながら御言葉に向き合いました。

鍵のひとつは間違いなく神殿です。ルカによる福音書は第一章冒頭でローマ帝国の高官であったテオフィロに献呈の辞があるようにイエス・キリストが地中海世界すべての人の救い主であることを明らかにしようとしています。それゆえに他の福音書がユダヤ人を対象にして書かれたのは違って、ユダヤ教らしさを薄めて福音書を編んでいると言われることがあります。

実際、そういう箇所もあります。しかし、ことユダヤ教の根幹であるエルサレム神殿については、ルカは他のどの福音書にも勝って濃い記述をしていることに改めて気付かされました。考えてみれば福音書の冒頭からザカリアが神殿で奉仕の務めをしているところに天使ガブリエルがヨハネの誕生を告げに現れます。またイエスが生まれて一ヶ月ほどして清めの期間があけたのち、幼子イエスを連れて両親が神殿に初子をささげにやってくる、シメオンとアンナに祝福される出来事があります。これは一般的なユダヤ人たちの生活に神殿がいかに密接に関係しているかを示すエピソードでもあるのです。そして今日の箇所は過越祭の巡礼の一コマです。エルサレム神殿のもつ意味、希望の拠り所、生活を貫く芯として場としての神殿と、神殿を中心に律法で規定された祭りがイスラエル民族のひとりひとりに、個人の生涯のなかに刻印されている。生まれたときから死にいたるまで、人々は神殿を通して養いを受けていると言っても良い。おそらく日本人的な感覚では七五三などのお宮参りあたりが感覚的に近いと思うのですが、日本人の多くにとってそれは習俗であって、信仰の領域にまで踏み込んでその行事に参加しているのはおそらくわたしたちキリスト者と同じくらいに少ないのではないかと思います。そしてユダヤ人にとっての神殿というのは習俗ではない。わたしたちの体に血管がゆきわたって酸素や栄養をはこび、体を養い、動かしているように、その血液が送り出される心臓のような、定期的に休むことなく拍動し続け、全身に血液を送り続けるポンプのような中心的な役割を果たしている。だからこそ、この決定的に重要な神殿の問題にからんでイエス様は戦われたのですし、祭司長、律法学者、ファリサイ派といった人々との対立が十字架にまでゆくわけです。もう少し、ユダヤ教の神殿について話をします。ユダ

ヤ人の生活にふかく神殿が入り込んでいるのは国の滅びと関係しています。紀元前 586 年にユダ王国が新バビロニア王国によって滅ぼされたあと、約 70 年間の捕囚期間をすぎて帰還した民はエルサレム神殿を再建します。これはペルシア帝国の許可のもとに行われた神殿再建で、この時建てられたのが第二神殿と呼ばれるものです。つまり紀元前 6 世紀からイエス様の時代までイスラエル民族は自分たち独自の国を持つことができない状態です。これは実は 20 世紀のイスラエル共和国の建設まで続く事態なのですが、イスラエル民族の歴史の転換点は、この民族の破局ともいえるべき捕囚期間にありました。このバビロン捕囚のさなかに彼らは、現在、わたしたちが旧約聖書として持っている文書の作成に取り掛かるのです。この作業は大体 800 年間かかって現在の 39 巻の旧約聖書が出来上がるのですが、まず最初にまとめ上げられたのが律法の書でした。ですから、ペルシア帝国がバビロニアを滅ぼしてエルサレムへの帰還と神殿の再建を許可したとき、この律法の書も持ち帰られたのです。エズラ記・ネヘミヤ記にこのあたりの事情は詳しいですが、人々が再建のなった神殿で律法の朗読を聴いてみな泣いたという記事がネヘミヤ書にあります。国が亡くなってしまった後、イスラエル民族は律法を正典化して生活の基盤とし、神殿を再建することでユダヤ教団として生き延びる道を歩み始めるのです。ルカの記述を読んで気付かされるのは主イエスの両親であるヨセフとマリアがこの伝統に極めて忠実に生きていることです。ユダヤ教の三大祭は過越祭、除酵祭、仮庵の祭です。わたしたちですとイースター、ペンテコステ、クリスマスですが、こういう祭りが信仰を促進、活性化、更新してゆくところはありますね。イスラエルでは地域の人が連れ立って巡礼団を組んで神殿にもうでたようです。これは治安がよくなかつ

たので安全を考慮した面もありました。しかし、逆にそれが災いして神殿に残ったイエスを置いて帰ってしまうことにもつながっているのですね。考えてみればわかりますが 12 歳というともう幼児とは違うわけで両親が手をつないで歩かなければならない年齢ではありません。ユダヤの成人は 13 歳でしたから、もう来年になったら両親に連れられてではなく、イエス様ご自身が自分でゆくようにならなければならない。そういう年齢です。ですからヨセフとマリアは帰りの巡礼団のどこかにイエスがいるのだろうとと思っていた。それで一日分の道のりを進んだところで、親類や知人の間を探したけれどもやはりいないことに気づいてエルサレムに引き返したのです。そして探してゆくと、イエスは神殿にいて学者たちの真ん中に座って議論をしていたという。しかも、その知恵に皆が驚いたというのです。学者顔負けというか、ここは大事なところですが、この時点ですでにイエス様は律法の何たるかを神の御心として理解しておられたのです。わたしがこの箇所を読んで思わされたのは、ルカは既に完成しておられるイエス様の姿を記したのだということです。神の知恵に満ちて律法を理解しておいでになった。神殿は国という統治機構が無くなった後、人々を統合する役割を果たしています。神殿はみなが集う場を提供していた。それは神の御心を示す律法に沿うはずのものでした。しかしながらこの律法の理解と実行が人間のもつ罪のために歪められていた。人々がイエス様の受け答えに驚くのは、神の御心にそって解き明かしたゆえです。ここに神殿というシステムは続いているけれども、日本のことわざでいえば「仏作って魂入れず」の状態、神さまの御心から離れた現実があるのです。ルカはそれを突きつけます。つまり、ここでわたしたちは旧約から新約へと連続しているものと非連続なもの、続いているものと続か

なかったもの、変えてよいものと変えてはならないものは何かを見せられている。それはイエス様が生涯の最後にエルサレムに入られ、宮清めをされ、そこでファリサイ派や律法学者と論争し、ついには誰も質問する者がいなくなる。そして神殿によってではなく、神の御心によってすべての者が生きようになるためにこの御方は十字架にかかれることとなります。両親が神殿にいる少年イエスを探し当てたのが「三日の後」であったという記述も偶然とは思えないですね。イエス様からんで「三日の後」といえばそれは十字架の死から三日目の復活を指すからです。そういうこれからこの御方の生涯で起きることの予告をルカはここでしているのだと見ることも出来るかもしれません。

最後に、この出来事を印象深いものにしてしているのが、母マリアが息子イエスを叱りますね。どこに行っていたの、みんな心配していたんですよ、こんな感じですね。これにたいしてイエス様がこうお答えになります。「どうして、わたしを探したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか」というのです。これは肉につながる親はマリアであるけれども聖霊によって身籠ったと言われるように、天の神こそが父であるという自己理解ですね。そしてこれがヨセフとマリアにはわからないのです。この部分が尊い。この両親はわからないけれどもイエスさまは彼らと一緒にナザレに帰って、両親に仕えてお暮らしになったとあり、母マリアはこれらすべてのことを心に納めていたとルカは記すのです。ここに主イエスの「仕え方」があり、人間マリアの受けとめ方がある。主イエスは理解の及ばない両親を突き放すのではない。下に見てさげすむものでもない。一緒に両親とナザレに帰り、この後 20 年弱を仕えて過ごされた。知恵ある者、力あ

る者が進んで仕える姿勢は愛そのものです。ここには主イエスがわたしたちに向けられる姿勢、仕える姿勢が明らかにされている。そして母マリアに目を転じれば、わたしたち人間が神さまの御心を分かるということは本当に少ないのだと思わされます。何を言われているか分からない。頭で理解できない。しかし、心に納める。心に残る。刻むという聴き方があるのです。わたしたちがふだん礼拝でしているのもそうなのではないでしょうか。語られた御言葉すべてを理解しているのではない。しかし心に残るものがある。そして、主ご自身も、わたしたちすべてが理解の及ばぬものであることを知りながらなお憐れみをもって仕えて下さる。そのことがイエス様が12歳であったときのエピソードから示されているのではないのでしょうか。わたしたちの主はこのように憐れみ深く、忍耐強い方であります。この方を救い主としていただく幸いを思い、主の御名を崇めます。

お祈りいたします。